

心筋疾患の核医学的診断

司会のことば

司会 東大・放射線科 飯尾正宏郎
三重大・第一内科 竹沢英郎

ガンマカメラ、画像処理装置などの核医学機器の普及と核薬理学の進歩につれて臨床の場における核医学的画像診断の応用は急速に拡大しつつある。特にタリウム201による心筋シンチグラフィーは心筋血流を直接反映するものであり検査法の非侵襲性と相俟って虚血性心疾患の検査法として心電図、心エコー図とならんで最もポピュラーな検査法の一つとなった。

このシンポジウムでは特に心筋そのものに疾病の本態がある心筋疾患一心筋症の診断に心臓核医学的手技がどのように有用であるかを議論したいと考える。上述のようにタリウム201はKイオンと同様な動態で心筋細胞内にとり込まれる性質を利用して心筋のシンチグラフィーを行うことが可能である。

シンポジウムの第Iの話題は肥大、拡張両型の心筋画像について西村、大和田両氏よりそれぞれ見解を述べ心臓核医学的手技による心筋症の病型診断の可能性を検討

することである。対向型ガンマカメラによる所謂SPECTが心筋症の病型判断の上で如何なる寄与を示すかについても検討したい。

シンポジウムの第II点はゲート心プールシンチグラフィーによる心室容量曲線の検討について論をすすめる。心室の各局所の容量曲線のFourier解析を行いその1～2次調波による収縮時相分析を小西、広江両氏からそれぞれ肥大型および拡張型について報告を聞き両型の収縮様式の差について検討する。成田氏にはglobalの心室容量曲線について肥大型心筋症の拡張期充満の特異性の検討をお願いする。

以上心臓核医学による心筋症の臨床評価の現況を論じた後第III点としてpositron ECT、NMRなどによる心筋の造影とともに代謝、病態生理に関する検討の現況および将来への見通しについて玉木、矢崎、西川の3氏に発言をお願いする。

1. タリウム心筋シンチグラフィー

1) 心筋シンチグラフィによる肥大型心筋症の心筋肥大、変性の評価

国立循環器病センター・放診部 西村恒彦
同 心臓内科 永田正毅

肥大型心筋症は、家族性、不均等な左室肥大および心筋線維の錯綜配列を特徴とする心疾患である。従来、心エコー図、心カテーテル検査などにより心血行動態、心筋性状について検討されてきた。一方、心筋シンチグラフィは心筋肥大、灌流欠損の程度を視覚的に観察でき、

circumferential analysis や SPECT の導入により心筋壁厚の定量評価が可能である。また、肥大型心筋症と心肥大を呈する高血圧性心疾患、心拡大を呈する拡張型心筋症との鑑別は本症の成因や手術適応も含め重要な問題である。そこで、心筋シンチグラフィを用いて、本症にお